

KYOTO UNIVERSITY

GUIDE BOOK 2023



京都大学大学案内 2023
知と自由への誘い

京大力、新輝点。



イメージしてください。

開かれた扉のむこう側。京大生として過ごす日々。

「憧れの風景」が「日常の風景」に変わる。

それはゴールではなく、スタートです

■ 京都大学の基本理念(抜粋)

京都大学は、創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由と調和を基礎に、ここに基本理念を定める。

教育

京都大学は、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、対話を根幹として自学自習を促し、卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる。京都大学は、教養が豊かで人間性が高く責任を重んじ、地球社会の調和ある共存に寄与する、優れた研究者と高度の専門能力をもつ人材を育成する(平成13年12月4日制定)。

アドミッション・ポリシー

京都大学は、日本の文化、学術が育まれてきた京都の地に創設された国立の総合大学として、社会の各方面で活躍する人材を数多く養成してきました。創立から1世紀以上を経た21世紀の今日も、建学以来の「自由の学風」と学術の伝統を大切にしながら、教育、研究活動をおこなっています。

京都大学は、教育に関する基本理念として「対話を根幹とした自学自習」を掲げています。京都大学の目指す教育は、学生が教員から高度の知識や技術を習得しつつ、同時に周囲の多くの人々とともに研鑽を積みながら、主体的に学問を深めることができるように教え育てることです。なぜなら、自らの努力で得た知見こそが、次の学術展開につながる大きな力となるからです。このため、京都大学は、学生諸君に、大学に集う教職員、学生、留学生など多くの人々との交流を通じて、自ら学び、自ら幅広く課題を探索し、解決への道を切り拓く能力を養うことを期待するとともに、その努力を強く

支援します。このような方針のもと、優れた学知を継承し創造的な精神を養い育てる教育を実践するため、自ら積極的に取り組む主体性をもった人を求めています。

京都大学は、その高度で独創的な研究により世界によく知られています。そうした研究は共通して、多様な世界観・自然観・人間観に基づき、自由な発想から生まれたものであると同時に、学問の基礎を大切に研究、ないし基礎そのものを極める研究であります。優れた研究は必ず確固たる基礎的学識の上に成り立っています。京都大学が入学を希望する者に求めるものは、以下に掲げる基礎的な学力です。

- (1) 高等学校の教育課程の教科・科目の修得により培われる分析力と俯瞰力
- (2) 高等学校の教育課程の教科・科目で修得した内容を活用する力
- (3) 外国語運用能力を含むコミュニケーションに関する力

このような基礎的な学力があつてはじめて、入学者は、京都大学が理念として掲げる「自学自習」の教育を受け、自らの自由な発想を生かしたより高度な学びへ進むことが可能となります。

京都大学は、本学の学風と理念を理解して、意欲と主体性をもって勉学に励むことのできる人を国内外から広く受け入れます。

受入れにおいては、各学部の理念と教育目的に応じて、その必要とするところにしたがい、入学者を選抜します。一般選抜では、教科・科目等を定めて、大学入学共通テストと個別学力検査の結果を用いて基礎学力を評価します。特色入試では、書類審査と各学部が定める方法により、高等学校での学修における行動や成果、個々の学部・学科の教育を受けるにふさわしい能力と志を評価します。



2022年、 京都大学は125周年

- 1897 京都帝国大学創立
理工科大学設置
- 1899 法科大学設置
医科大学・附属医院設置
附属図書館閲覧開始
- 1906 文科大学設置
- 1914 理工科大学、理科大学と工科大学に分離
- 1919 法・医・工・文・理の各分科大学を学部
に改称
経済学部設置
- 1923 農学部設置
- 1925 時計台竣工
- 1946 最初の女子学生入学
- 1947 京都帝国大学を京都大学に改称
- 1949 新制京都大学発足
教育学部設置
湯川秀樹教授、ノーベル賞受賞
- 1950 宇治分校開校
- 1960 薬学部設置
- 1992 総合人間学部設置
- 1993 教養部廃止
- 1997 創立百周年記念事業を実施
- 2003 大学院工学研究科、桂キャンパスへ移転開始
百周年時計台記念館竣工
- 2004 国立大学法人京都大学発足
- 2017 指定国立大学法人に指定
- 2022 創立百二十五周年

脈々となつづく知の軌跡。
きみの歩む一歩が
つぎの125年を創る

湊 長博 京都大学総長

1951年、富山県に生まれる。専門は医学、免疫学。京都大学医学部卒業。医学博士。京都大学大学院医学研究科長・医学部長、京都大学理事・副学長、プロボストなどを歴任。本庶佑特別教授との共同研究は、新しいがん免疫療法として結実し、本庶特別教授の2018年ノーベル賞受賞にも繋がった。

みずからの内なる声こそ羅針盤

高校生の私にとって、大学という場所は中にながら入っているのかわからない、玉手箱のように見えました。インターネットが普及した現代とは違い、当時の地方の高校生がふれられる大学の情報は限られたもの。京都大学医学部を選んだのも、化石好きが高じて生命の起源を学べる場所を探した結果、高校の教師から「生命なら医学部だ」と。

高校時代は数学少年でもありました。一癖ある数学の問題があると、授業そっちのけで数式と向きあった。好きなことを楽しみながら追究し、どんどんなめり込む。私の選択は、そうした反応の連続です。大学卒業後のキャリアなど、考えてもみなかった。とにかく胸にあったのは、「新しいことが待っているに違いない」という大きな期待でした。

新たな環境にさらされ、未知の自分と出会う

とはいえ、入学した年は大学紛争の真っ只中。今のコロナ禍よりもひどい状態で、授業は開講されず、空いた時間を埋めるように読書をしました。大きな出会いは、F・M・パーネットの『Cellular Immunology』。現代免疫学の理論を確立し、ノーベル生理学・医学賞を受賞した名著です。夢中になりましたが、わからない用語があると、とたんに理解できなくなる。一人で読んでいては埒があかないと、免疫学の研究室を訪ねました。

研究室のメンバーは3回生の私をこころよく迎え入れてくれました。「実験がしたい」という直談判にも二つ返事で了承し、好きにさせてくれた。実験というものは、失敗・成功にかかわらず、かならずなにかが起こる。その現象を見て、考える。このプロセスに、「これまでにのめり込んだなかで、実験がいちばんおもしろい」と魅了されました。

のちの研究テーマである「がん免疫」に出会ったのも『Cellular Immunology』でした。最終章、期待に胸を膨らませてページをめくると、たったの数ページで終わってしまった。「〈がん免疫〉というものを信じているが、残念ながらわかっていることはほとんどない」と。未知への探究心がふつふつと湧いてきました。

私にこそできるサイエンスを見いだす

転機は5回生。入り浸っていた研究室の教員の協力で、学部生ながら英語論文を執筆しました。著名な学術誌に掲載されると、「うちで研究しないか」とアルバートアインシュタイン医科大学から連絡があった。師匠と仰ぐことになるバリー・R・ブルーム博士からでした。卒業まで待ってもらいはしましたが、即断して渡米。がん免疫に関する研究をはじめたのです。

ですから、私は大学院に進んでいません。さらに就労条

件すら聞かずに海を渡りましたから、リスクな選択だともいえます。でも、私にとっては自然のなりゆき。好きなことに一所懸命に取り組んでいたら、道ができた。リスクをとらず、着実に前進するのも一つですが、そうすると成功してもあまり驚きはない。それなら、自分の内なる声に従い選択したい。アメリカで3年を過ごしたあとも同じです。ブルーム博士の勧めでお会いした石坂公成先生の一言で、日本に戻り、内科医としてはじめて患者を診ることに決めた。当時の私には、もっとも先の読めない選択でした。

学生時代の臨床研修先は呼吸器内科。肺がんは当時、きわめて死亡率の高い疾患。一人も助けられない、厳しい現実打ちのめされました。それ以来、〈謎解き〉のサイエンスに没頭してきましたが、医師としてふたたび、がんの患者と向きあうなかで、これまで挑戦してきた私のサイエンスの意義が明確になった。〈患者がいる・腫瘍がある〉という事実はどう対応するのか。この視点こそが私のサイエンスの根拠だ。

12年の臨床経験のなかで、「治したい」という医師の思いに応えるには、サイエンスが追いついていないことも痛感しました。患者を知る私にこそできるサイエンスがあるはずだと、基礎研究の道に戻ることを決めたのです。当時、臨床から基礎研究に戻る例はめったになかった。だけど、私にとっては、これも自然のなりゆきでした。

想像できない道を選び続けた

それから京都大学で20年、研究を続けました。最終的には、のちにノーベル賞を受賞した本庶佑先生と組んだ研究が実を結び、がんの新たな療法を確立しました。私たちのマウスでの実験は、米国でヒトに応用され、メラノーマ患者の4～5割、肺がん患者の2割を治癒することに成功しました。肺がんが治るなんて、学生時代にはありえなかったこと。報せを聞いたときは、ほんとうにうれしかったです。

頭から離れない一言があります。米国のがんに関するシンポジウムで、ある研究者に観客が問うたのです。「すばらしい研究です。ところで、一人でも治療に成功したのですか?」。がんの研究はたんなる〈研究〉ではだめだ。そう突きつけられたのです。でも、いまなら胸を張り、「はい、成功しました」と答えられる。あのときの観客の方たちにも届く仕事ができただけは、私の誇りです。

ターニングポイントに立つたびに、先の読めない道ばかり選んできました。たしかに、まっすぐにのびる見晴らしのよい道を歩くのは気持ちいい。だけど、私は曲がり角が現れたときにこそ、ワクワクする。どうせ先は見えないのだから、みずからの声に従い、行きたい道をゆく。型通りに進む人生はおもしろくないですからね。



将来のことなど考えず、

読書に明け暮れ出会った一冊が進む道を決めた

湊総長大学時代



勉強するからには楽しまないと損。

一所懸命に、「いま」を楽しめ！



女子学生特別座談会

キャンパスを縦横無尽に駆けめぐる 私たちの好奇心と探究心

大学合格は、ゴールではなくスタート。

胸に芽生えた好奇心を解き放ち、みずからを磨く旅への出発です。

集まった3名の学生生活は、まさに三者三様。

好奇心と探究心が京都大学のキャンパスを縦横無尽に駆けめぐり、唯一無二の経験が生まれています。

大学生活はこんなに自由でいいのです！ 女性のみなさんもそれぞれの好奇心を胸に、京都大学に飛びこみませんか

出席者

1 稲垣 恭子

京都大学 男女共同参画
担当理事・副学長

2 宮脇 里奈さん

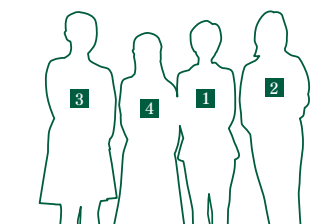
医学部医学科6回生

3 東 さくらさん

工学部物理工学科4回生

4 堀口 叶夢さん

教育学部3回生



京都大学吉田泉殿
1階セミナー室にて実施

稲垣 私は学内で男女共同参画を担当していますので、本日は、女性のみさんから見た京都大学の魅力や学生生活などについてお話をお聞きしていきたいと思ひます。

まず、宮脇さんと堀口さんは、関東のご出身ですね。地元を離れて京大を受験する決め手やきっかけはなにかありましたか。

宮脇(医) 京大に興味をもったきっかけは、私が受験する前年から始まった特色入試でした。医学部の受験といえば、点数だけで評価される印象がありますが、特色入試では多様な視点から私の能力を見てもらえます。そこからいろいろ調べ始めて、「すてきな大学だな」と思ひました。

堀口(教) 私は父の転勤で小学校の6年間を関西で過ごしたこともあり、関西の人の温かさに惹かれていました。また、京大には「おもしろそう」というイメージを漠然と抱いていて、「京大に行けば、おもしろい人たちと出会うのではないか」という強い好奇心が決め手でした。

稲垣 京都出身の東さんは、流体力学に関心があるそうですが、なぜこの分野に進まれたのですか。

東(工) 小学生のころから両親とテレビで観戦していたF1(フォーミュラー・ワン)の自動車レースがきっかけです。最初は「カッコいい」と見ているだけでしたが、速度の差がなぜ生まれるのかを調べ始めたところ、空気抵抗を考えて車が設計されていると知りました。空気の流れに興味をわいたのは、そこからでした。

稲垣 F1がきっかけで流体力学に興味をもった方には初めてお会いしました(笑)。

私は広島県の出身で、成長につれて実家から離れたという思いが強くなりましたが、みなさんはどうですか。

宮脇(医) 私も一人暮らしへの憧れはありました。

堀口(教) 新しい生活が始まる予感がしてワクワクしました。京大は、大学の徒歩圏内に下宿する学生がほとんどですし、東京と違って、電車を使わなくても気軽に友人に会えます。空きコマに哲学の道を歩いて銀閣寺に行くなど、周りには歴史や文化を感じられる場所も溢れていて……。この環境は京都ならではのものだと思います。

宮脇(医) 私はもうすぐ卒業ですが、京都の学生だからこその経験がこの6年間にたくさん詰まっています。1回生の全学共通科目では、吉田山で昆虫を捕まえて標本にしたり、鴨川の水中生物を観察したり……。大学のすぐ近くの自然と大学とが密接に

結びついた学問が歴史的にも盛んで、自然は学生生活にも溶けこんでいます。いくつになっても、鴨川を見るたびに学生時代の6年間を思い出さずらうと思ひます。

稲垣 私も、就職して2年ほどを東京で過ごしましたが、テレビなどで京都の風景が映ると、もうグッときていました(笑)。

描いた青写真を現実にできる京都大学の気風

稲垣 東さんの物理工学科は、女子が少ない学科ですよ。

東(工) 私の学年は、230人のうち女子学生は15人だけです。女性の人数が少ないぶん仲もよく、のびのびと学べています。いまは女性エンジニアが重宝され、研究機関も女性研究者を積極的に探していると教授から聞いています。工学系に進んで、エンジニアを目指す女性にとっては逆にチャンスかもしれません。

稲垣 期待されると、やりがいはありますね。大学院に進学予定ですが、流体力学への想いは変わりませんか。

東(工) 幅広く学んだうえで、流体力学は身近な暮らしと関わりが深いことに惹かれています。大学院では、シミュレーション解析の研究室に進む予定です。コンピュータ上での計算に興味をわき、そこで流体力学を扱いたいと考えています。

稲垣 みなさんいろいろなことにチャレンジされていますが、今回は3人ともがダンスの経験者という点は共通していますね。

宮脇(医) 所属するダンスサークルでは、チームとして優勝して11月祭(学園祭)のいちばん大きなステージに立ったこと、Zepp Nambaという大きな舞台に立ったことが思い出です。

堀口(教) 私は、高校時代にアメリカで開催されたダンスの世界大会に出場しました。踊りを通じてはもちろんのこと、結果発表の際、涙を流しながら励まし合ったり称え合ったりする姿を目の当たりにし、ことばを介さずともコミュニケーションできることを実感しました。

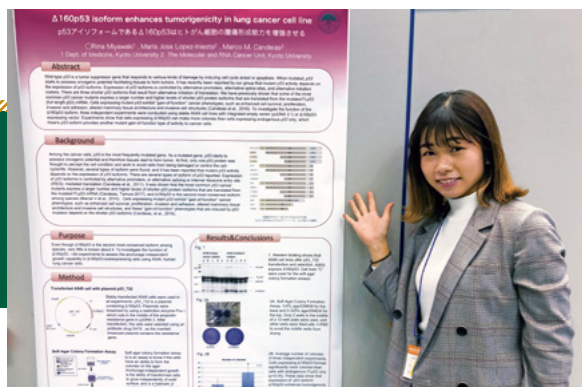
東(工) そうですね。ダンスに言語は関係なく、国や民族を超えて感動し、通じあえることが、私もダンスの魅力だと思います。

稲垣 学業以外のことにも積極的に楽しんでいるのはすごいですね。そのほかに、印象的なことはありましたか。

宮脇(医) 私は、KS-CoM(京都大学医学教育を考える学生の会)で活動をしています。医学生自身がみずからの医学教育を考え、教員と学生との対話を促す目的で懇談会などを企画しています。自分たちの受ける教育について、受け身にならずに教員と議論を交わし、ともに良い医学教育をつくっていかうという理



Lina Miyawaki
宮脇里奈さん
医学部医学科6回生
東京都 広尾学園高等学校 出身



上/日本分子生物学会でのポスター発表。ラボの先生やメンバーとは英語でのコミュニケーションがメイン
左/ダンスサークルで活動。11月祭の大きなステージから見た景色は忘れられない思い出。ほかに医学部硬式テニス部にも所属し、女子キャプテンとして部活をまとめた

念で活動しています。

医学部生のキャリアを考えるイベントも企画・開催しました。京大にはだれもまだやっていないことを実現できる雰囲気があります。そういった新しい活動に、先生がたがサポートして下さるのもありがたいと感じています。

堀口(教) 教育学部の講義でも、先生がたがご自身の研究を学生に共有してください。研究内容も多様ですから、「こんな研究もできるのか!」と、可能性を肯定的に拡げていただけるような気持ちになれます。

稲垣 実は教員も、学生からの積極的な働きかけを待っています。意表を突いた意見や指摘を喜ぶ雰囲気が京大にはありますね(笑)。

思うぞんぶんに好奇心を発揮して、外に外に!

稲垣 3回生の堀口さんはこれまで、研究とは別にどんな活動をされてきましたか。

堀口(教) 観光ガイドのサークル活動に力を注いできました。コロナ禍で外国人観光客向けの通訳ボランティアという本来の活動ができなかったため、新しい形で京都の文化を外国に発信する活動をしています。最近では、ミャンマーの学生とZoomをつなぎ、京都の観光地を歩きながら英語で紹介するオンラインガイドをしたり、日本庭園にこたつを置き庭喫茶を開くなど、柔軟に活動の幅を広げています。

稲垣 東さんも、国際的な活動をされていますね。

東(工) 国連で実際に開かれた会議の課題を模擬的に再現する模擬国連サークルに所属しています。半年に一度、他大学と共同で模擬会議を開きます。1人に1国の大使の役割が割りふられ、テーマについての担当国のスタンスを調べたうえで、議論や交渉をします。

稲垣 ご自身の研究とは異なる関心ですが、きっかけはどのようなことだったのでしょうか。

東(工) 中学生のころ、英語のスピーチコンテストに挑戦していました。発音練習をかねて海外のニュースを見始め、日本ではあまり報道されない国際問題にふれたことがきっかけです。研究に専念するにつれて視野が狭くなりがちなので、課外活動などでアクティブに外に目を向けることを心がけています。

宮脇(医) 確かに、医学部でも、その必要性を強く感じます。1、2回生のころは全学共通科目がありますから、他学部の友人との関係が保たれます。ところが、専門科目になると医学部構内で完

結してしまう。閉塞感からか、まったく違う分野の勉強をはじめの人など、個人的な活動を広げる人が実際に多いですね。幸い、京大には相互に干渉しすぎず、専門分野以外の活動も自由のできる雰囲気や環境があると思います。

堀口(教) お互いの興味・関心に寛容だけでなく、話をしたり聞いたり、考えを共有することに寛容な環境でもありますね。

稲垣 好奇心の向かう先はどこであれ、好奇心を育てようという心意気が、教員にもあります。

宮脇(医) 京大は、好奇心の受け入れ先を用意してくれています。「知りたい」と思うことがあれば、その研究をしている先生に話を聞きにいける雰囲気がある。学部内の研究分野も多様で、医学部でプログラミングに興味をもったとしても、それを受け入れる研究室がちゃんとある。好奇心の着地点がたくさんあるから、私たちも多様な軸で楽しめています。

稲垣 自分の関心から最先端の研究につながる道が、京大のキャンパスの中にたくさんあるということですね。

東(工) ある先生に相談すると、「その分野なら、この先生はどう?」と別の先生を紹介していただける。興味や関心が次々につながるのも魅力です。

稲垣 入学前からもっていた関心の芽が、大学で飛躍的に花開く。そうした経験を、みなさんがされているようで、将来が楽しみです。

行くべき道をまっすぐ歩むだけが正解じゃない

稲垣 みなさんのこれまでの活動をお話いただきましたが、それぞれ京大での学生生活を満喫されていて、嬉しく思います。でも、その中で失敗や挫折したこともあったのではないですか。

宮脇(医) 私は入学してすぐのころに、興味のあることに手を出しすぎてバクしたことがあります(笑)。実は、下回生のときは、よく体調を崩していました。だからこそ、いまは自分の限界を知り、コントロールできるようになったと思います。

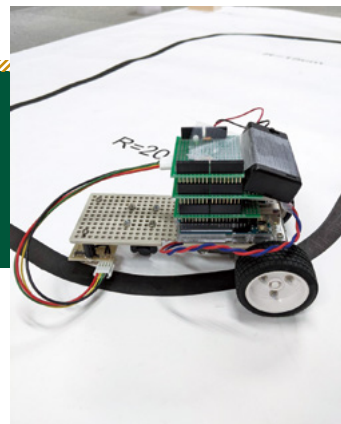
東(工) 私は勉強の面で、専門科目の中には、難しく、教科書を読んでも自分の力では先に進めないということがよくあります。そんなときは、必ず友人と集まって勉強会を開いています。お互いを支えあえる仲間に出会えていなければ、挫折していたかもしれません。

堀口(教) 私は、大学生活では積極的に海外に行きたいと考えていましたが、入学してすぐにコロナ禍になり、叶えられていません。ただ、国内を巡って日本の良さを再認識できたのは収穫でした。



Sakura Azuma
東 さくらさん

工学部物理工学科4回生
京都府 京都府立洛北高等学校出身



左/F1ドライバー、セバスチャン・ベッテルの大ファン。毎戦グッズを身につけてTVの前に座る 右/機械システム工学実験で3人チームを組み作製したライトレーサー。いかに正確にライン上を走行するかをチームで追求した



Kanon Horiguchi
堀口 叶夢さん
教育学部3回生
東京都 東京学芸大学附属高等学校出身



上/1学年60人と、人数の少ない教育学部では、学年の垣根を超えたイベントが多数。11月には、11月祭と並行して教育学部祭が開催される。学部祭にむけたカウントダウンボードの作成中 左/コロナ禍で観光ガイドサークルの通訳ボランティアができないかわりに、寺社と提携してイベントを企画。写真は無鄰菴で日本庭園を楽しむ「こたつde庭喫茶」

しっかりと自国のことを学んだうえで、これから海外にも進出していきたいです！

稲垣 失敗や挫折をしない人はいませんし、学生時代の失敗は必ず将来の糧になるはず。成功体験だけでなく、失敗の経験も将来に活かしてもらいたいですね。

その将来についてですが、宮脇さんは、卒業後は医師になると決めているのですか。

宮脇(医) 初期研修には進みますが、そのあとの選択肢がありすぎて迷っています。臨床医か研究医にと思っていましたが、そういう枠では収まりきれないいろいろな職種があると入学後に初めて知りました。研究面でも、ウェットな研究だけでなく数理解析によるドライな研究も、社会的な公衆衛生の研究もあります。省庁や団体、組織で社会保障の仕組みを考える仕事もあるし、医療系の企業で力を発揮することもできる。

稲垣 迷うくらいですね(笑)。東さんは工学系ですが、進路はどのような計画でしょうか。

東(工) 卒業後は大学院に進学する予定です。その後は、メーカーなどの企業に就職して、知識や技術をダイレクトに活かすことにも魅力を感じていますが、いつかは日本に留まらず、海外にも活躍の場を拡げたいと思っています。

稲垣 模擬国連のようなサークル活動をされていると、各国の立場や国家間のパワーバランス、力による外交など一筋縄ではいかない国の運営も体感されてきたでしょうね。こうしたグローバル社会のもとでは、工学の知識を活かしつつ働く場合でも、社交力や国際的な知見や判断力は欠かせません。これまでの東さんの活動が実を結ぶときが楽しみです。

堀口さんは3回生。将来の方向性をどう考えていますか。

堀口(教) 大学生活では、たくさんの人に出会い、たくさんの経験ができました。それらの経験を、いつか自分のことばで伝えられるアナウンサーやレポーターのような仕事をしたいと考えています。これまでの人生で知の喜びや楽しみをたくさん享受したので、それを多くの人と共有したいという思いがあります。

稲垣 教育学部のどの講座に進まれるのですか。

堀口(教) 教育社会学の分野で、コミュニケーションやメディアについて考えたいと思っています。

稲垣 私が教育学部の教員時代に担当していた講座ですね(笑)。

堀口(教) はい、偶然にも！(笑) ダンスの経験を通して、身体的なコミュニケーションに興味をもちました。さらに、京都での生活

の中で、世の中にあふれる素晴らしい文化にふれ、それを伝える経験ができたことも、いまの目標につながっています。

東(工) 海外の学生とふれあう機会といえば、留学をまず思い浮かべますが、京大は海外からの留学生が多いこともメリットだと思います。留学生が受ける授業も受講できるので、留学しなくても外国の学生と知り合いになります。

大学生生活、むだな経験はきつとなにひとつない

稲垣 最後になりますが、これから京大受験を目指す受験生へのメッセージをお願いします。

東(工) 女子で工学部の受験を考えている方は、女子学生の少なさに不安を感じるかもしれません。でも、人数が少ないぶん仲もよくなりますし、サークルの数も多いので、自然と人脈も広がります。

工学に興味があれば、おじけずに京大を選んでください。工学は実社会と密接につながる学問で、学ぶ楽しさをぞんぶんに味わえると思います。女性エンジニアがまだ少ない今だからこそチャンスです(笑)。

堀口(教) 地元を離れた一人暮らしには不安を感じる方も多いと思います。しかし、京大は世界中から人が集まる場所。各々が各々の故郷から京都に集まるのです。自然と多様な価値観にふられる環境で、一人暮らしの学生も多く、みんなで京都に暮らすという感覚が芽生えます。近畿圏以外の方も、京都での暮らしに夢を膨らませてみてください。

宮脇(医) 医学部に関していうと、医師免許は京大以外でも取ることができます。難関と言われていますが、乗り越えた先には、つねに最先端の研究をする先生が身近にいて、周囲のなにげない一言に、最先端の知見が溶けこんでいます。「知りたい」と思えば、日本のトップの研究者がサポートしてくれる、とても贅沢な環境です。挑戦の気持ちを忘れないでほしいと思います。

稲垣 大学時代の経験や学んだことの多くは忘れてしまうかもしれませんが、みなさんそれぞれの心や記憶に沁みついて一生残るものは必ずあるはず。そういう蓄積をたくさん重ねることこそが、大学でいちばん経験すべきことなのかもしれません。そうしたなにかがどこかでエネルギーに変わる。むだな経験はきつとなんとも思いません。

みなさんのこれからの活躍に期待しています。



Aki Yamamura

山村亜希

総合人間学部／地球環境学堂 教授

広島大学附属福山高等学校出身。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。京都大学博士(文学)。京都大学総合博物館助手、愛知県立大学日本文化学部准教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授などを経て、2020年から現職。専門は歴史地理学。NHK放送「プラタモリ」第76回・第113回の案内人も務めた。

〈いま・ここ〉に息づく過去の記憶。

悠久の歴史をたどり読み解く地のことわり

東京や大阪など、現代の都市のほとんどは、江戸時代の城下町の構造を基になりたっています。いちど築かれた道路や町並みをつくり替えるのは至難の業。地図を眺めれば、お城を避けるように迂回する鉄道や、古い区画を活かして整備された住宅街などに会うことがあります。地図には、その土地の人たちが歴史のしがらみのなかで工夫し、悩みながら町をつくった痕跡が残されています。

こうした地図の見方に出会ったのは、大学1年生時に受講した人文地理学の授業。吉田キャンパスのそばに、川端通から東大路通までを斜めに横切る白川道があります。地図を見て、「若盤の目の京都に斜めの道?」と疑問をもつ人は多いのですが、そもそも道とは場所と場所をつなぐもの。だれが、なんの目的でつないだのかを考えずに道は語れません。実は、戦国時代には、白川道はさらに北東に延び、比叡山の南を越えて近江の坂本に至り、琵琶湖を船で渡れば安土まで至ることができました。一説では、京都への最短経路として織田信長がしばしば使ったとも言われています。目で見える風景をもっと広い範囲の中で捉え、そこに歴史の経緯を重ねて考える。これが地理学のおもしろさと教えられました。

いまは、城下町が築かれた江戸時代当時に着目しています。城下町は、幕府の命で地方自治を担った「藩」の拠点。どの城下町にも城や武家地、町人地などの共通の要素がみられます。こうした城下町のモデル化は1970年代までの研究成果。研究をはじめた2000年代には「城下町の研究なんて古い」と言われていました。でも、要素は同じでも、組み合わせ方は城下町ごとに違う。この違いをたどれば、地域の地形や政治・経済・文化・宗教の影響を受けながら、町づくりに試行錯誤する藩の姿が見えてきます。そうしてできた町の「かたち」はいまも、私たちの暮らす現代都市に息づいています。

たとえ時代遅れと言われても、内なる学問への欲求に素直に進んできたのは、「学問はこうあるべき」と押しつけられない環境の京大だったから。私の研究は、いますぐに社会が必要とするテーマではないかもしれませんが。でも、私以外の人には考えつかない、思いついても解けないテーマだという自負があります。それを京大の周りの人たちもおもしろいと思ってくれた。専門外の分野でも聞く耳をもち、根源的な問いを受けとめてもらえる環境だったからこそ、いまの自分があるのだと感じています。

関心をとことん追究することは、場合によっては独りよがりになる恐れもあります。そのため、「他者に語る」ことはつねに意識し、努力しています。どんな分野であれ、興味をもって見つめる針先の周囲に、空間的な広がりと、歴史という時間の長さを感じてほしい。かつて自分が授業をとおして受けとったメッセージをつぎの学生たちに託したいと思っています。



2015年に中学生向けのフィールドワークを開催。白川道を歩き、沿道に残る石仏や石碑などの歴史の痕跡を調査した



Shinji Matsunaga

松永伸司

大学院文学研究科 准教授

東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。博士(美術)。東京都立大学や東京大学での非常勤講師、立命館大学客員研究員などを経て、2021年から現職。専門はゲーム研究と美学。2015年から文化庁メディア芸術連携促進事業として国内外のゲーム研究をまとめる作業を担当。2018年には単著『ビデオゲームの美学』(慶應義塾大学出版会)を刊行。

美学で紐解くビデオゲームの可能性。

感性を手掛かりに現代の「遊び」に挑む

演劇や文学、映画など、人間はさまざまな表現形式の作品を生みだしてきました。そのなかでビデオゲームはどのような固有の表現をもつのか。美学を基盤にこの問いに挑んでいます。美学とは感性や美的な事柄を扱う学問。たとえばファッションなどに対して「抜け感がある」というほめ言葉をごく自然に使いますが、「抜け感がある」という性質は、「青い」とか「四角形である」といった種類の性質とどう違うのか。それは客観的な性質と言えるのか。私たちがふだん感覚的になんとなく了解していることを哲学的に考える分野です。

たとえばRPG(ロールプレイングゲーム)ではキャラクターを操作して移動したり人に話しかけたりすることで作品が展開します。こうした作品とプレイヤーとの相互作用はビデオゲームではお馴染みの特徴のひとつ。では、映画や小説のような相互作用的ではない芸術とビデオゲームは、どこまで同じでどこから違うのか。プレイヤーは具体的に作品のどの要素と相互作用しているのか。作品の構造やプレイの経験をとことん言語化することで、ビデオゲームならではの固有性が見えてきます。

ビデオゲームを研究対象として捉えるようになったのは、学部生時代にSNS上に立ち上げたRPGを語るコミュニティがきっかけ。「RPGの定義とはなにか」などと議論を戦わせるなかで、研究対象としての豊かな可能性に気がつきました。とはいえ、当時は日本語での文献がほとんどなく、本格的に研究に取り組めるようになったのは修士論文の執筆過程で外国語文献を読む力を身につけてから。2000年代初頭に英語圏で隆盛したゲームスタディーズの蓄積にふれ、ビデオゲームの研究という未開拓の分野に挑む手ごたえを掴んだのを覚えています。

幼少期からビデオゲームで遊びながらも「この独特の経験は

一体なんなのだろう」という問いを抱いていました。いまま根本にあるのは広い意味でのゲームや遊びを深く理解したいという探究心。古代エジプトでの最古のゲーム誕生以来、人類はさまざまな遊びに興じてきました。ビデオゲームの歴史は50年ほどですが、コンピュータの力によって遊びのあり方を劇的に変えたものです。同時にそれは、一方では伝統的なスポーツやボードゲームの子孫であり、もう一方では伝統的な物語やごっこ遊びの子孫でもあります。古来からある人間の欲求が最先端の技術をとおして表現されてきたのがビデオゲームだと言ってよいでしょう。理論を組み立て、具体的な作品や経験との対話をつづけながら、ビデオゲームという表現形式そのものをもつポテンシャルに迫りたいと考えています。



研究室では、実際に作品をプレイしながらビデオゲームの理解を深めることも。ポピュラーカルチャーのような身近な題材をとおして、大学の学問を「自分の問題」として考える姿勢を学生に伝えている



Ayae Kinoshita

木下彩栄

大学院医学研究科人間健康科学専攻 教授

愛知県立旭丘高等学校出身。京都大学医学部卒業。京都大学博士(医学)。京都、奈良、東京での脳神経内科医としての臨床経験の後、大学院で博士号取得。生理学研究所 助手、ハーバード大学留学、京都大学医学研究科 助教授などを経て、2005年から現職。専門分野は脳神経内科学、神経科学、在宅看護学。

ヒントは暮らしのなかにあり。

医学と看護学の一对で、特効薬のない疾患に立ち向かう

高齢化が進む日本で、将来5人に1人が罹患するとされる認知症。その原因疾患の一つであるアルツハイマー病は、加齢などによる脳の神経細胞の老化が引き起こす疾患です。現在、特効薬はありません。病気とともに生きる患者さんが、できるだけ長く自立した生活を送れるよう、病態を解明する基礎研究と、ケアに焦点をあてた臨床研究の両輪で研究を進めています。

認知症の患者さんには、暮らしが困難になる「生活障害」が現れます。できないが増えると、自己肯定感が低下したり、いらだちなどの精神的な不安定さが出てきます。そのために、周囲からの孤立や、介護者との軋轢につながりかねません。暮らしの支援は医師の力だけでは不十分で、看護師や理学・作業療法士、地域のケアマネージャーなどの多職種との連携が不可欠です。京大の医学部人間健康科学科は、まさに多職種の専門家が揃う場。基礎研究のエビデンスを多職種で共有し、生活改善の提案などに直につながられるのは大きな強みです。

暮らしと症状が密接に関係する認知症研究では、日々の出来ごとのなかに研究のヒントが転がっています。ある患者さんのご家族が、「母が血圧計の数字を読めなくなった」とこぼされたことがあります。研究を進めると、時計の数字の字形によって時刻を認識できなくなるなど、認知症の患者さんには認識しづらい字形があるとわかりました。些細なインターフェースの違いが、自立した生活に影響することに着目し、臨床の事例にもとづいた使いやすい家電の開発にも精力的に取り組んでいます。

ケアや支援を最大限に活かすには、認知症の早期発見が肝要。医学的な治療の面からはもちろん、介護保険制度を活用した介護サービスが受けられれば、継続的に人の目が届き、生活の破綻や孤独死などのリスクを減らせます。ビデオ通話やアプリ

ケーションなど、ICT技術を積極的に取り入れ、微細な生活障害を検出する診断ツールの開発にも力を注いでいます。

幼少期は、手塚治虫の医学漫画『ブラックジャック』で描かれる倫理観に影響を受けました。そうした倫理観と、「病んだ人に寄り添う」という自身の理想の職業人像が合致し、医学の道を志しました。生後4か月の息子とともに渡米して研究するなど、いま思えばハードな経験もりましたが、「一生涯、打ちこめる仕事をしたい」と選んだ医師としての職務を全うしたいという信念がぶれたことはありません。認知症研究は医学・看護学の急務。多くの人に寄り添えるよう、これからも力を発揮したいと考えています。



微細な生活障害を検出するアプリケーション開発の試作版を前に、学生と議論を重ねる。検出の正確性だけでなく、使いやすさなども重要な観点のひとつ



Kosuke Shiraishi

白石晃將

大学院農学研究科 助教

岐阜県立多治見北高等学校出身。京都大学農学部卒業後、同大学院農学研究科博士課程及び思修館プログラム修了。京都大学博士(農学)。外務省経済安全保障課 外務事務官、国連食糧農業機関食品システムおよび食品安全課 食品安全専門官などを経て、2021年から現職。専門は応用微生物学、分子細胞生物学。FAO時代から科学コミュニケーションにも積極的に取り組む。自然界、特に植物葉面に棲息する微生物について、わかりやすく紹介した動画を公開中。
<https://www.youtube.com/watch?v=nF6HhN8dKvQ>

国連機関で再発見したアカデミアの価値。

いつか、世界の食料政策を変革する人に

いま、世界には約8億人の飢餓に苦しむ人がいます。安全ではない食べものを口にして病気になったり、そもそも食べることすらできない人たちがいるという状況に幾度も直面し、世界の食料政策の議論にもっと深く携わりたいという思いが強まりました。昨年、ローマにある国連食糧農業機関(FAO)本部から4年ぶりにアカデミアの世界にもどり、現在は、微生物が持つ細胞機能について理解し、食料や資源・環境問題に応用利用すべく、研鑽を重ねています。

FAOでは、食品の安全性を守る仕事をしていました。安全性が損なわれるもっとも多い原因は、微生物による汚染。不衛生な水や調理器具などをとおして混入する病原菌は着色や異臭といった食品の腐敗を引き起こします。食品への汚染が発覚すると、FAOに加盟する180か国以上のネットワークを活用し、発生地や輸出量、輸出経路、輸出先での販売経路などを追跡して健康被害の拡大を防ぐのです。

FAOで対象とした微生物は病原菌などの「悪いやつ」ですが、学生時代から現在まで、アカデミアでは、食料増産などにつながる「いいやつ」を対象に研究に取り組んでいます。いまから考えると、農学分野への進学は必然で、祖父母の農作業を手伝ううちに、気がつけば食や農に貢献したいという思いが芽生えていたのです。

顕微鏡を覗いてマイクロな世界と向きあう一方、くすぶりつづけていたのは海外への思い。いまにつながる扉を大きく開いたのは、第1期生として履修した京都大学大学院思修館プログラムの「海外武者修行」でした。農学研究科での研究で培った専門性をベースに実践力を磨くとともに、異分野理解や語学習得などでも成長を感じた1年間でした。

思えば、幼少期から未知の場所に飛び込むことに抵抗はあり

ませんでした。大学院修了後に入省した外務省では、新人にもかかわらず一人で国際会議に参加するチャンスを与えてもらい、日本代表として発言する機会がありました。前日は緊張で眠れないほどでしたが、この経験のおかげか、いまはもう大抵のことは緊張しません(笑)。迷ったら、とりあえずやってみることを選ぶ性格がたくさんチャンスを引き寄せてくれました。

研究者としては、まだまだこれから。FAOなどの国際的な政策討議の場では、最先端の科学的な知見をもとに議論がなされます。専門性を高め、議論の土台となる知見を生み出す研究者の重要性を実感したことも、アカデミアにもどった理由。より責任ある立場で、いつか国際会議の場で力を発揮したいという思いを胸に、まずは一步一步、成果を積み重ねることが目下の目標です。



大学院生のころ、国際協力機構(JICA)短期海外青年協力隊としてバングラデシュに派遣。農村開発に携わる傍ら、屈託のない子どもたちの笑顔に、開発援助の意義や実施方法を再考させられた